



SDGs×ESD レポート Vol.12

ESD は (Education for Sustainable Development) 略称で「未来を変える人づくり」を意味します。

発行：NPO法人持続可能な開発のための教育推進会議 (ESD-J)

SDGsの達成のために手を取り合い、行動する人々が存在する同じ世界に、残念ながらそれに逆行する人々があります。ロシアのウクライナ侵攻は、多くの難民を生み出し、民間人への残虐な行為は国際社会を震撼させています。ロシアに対しては、様々な経済制裁が発動されていますが、終結への道筋は不透明です。一日も早い戦争の終結、平和の回復を希求します。

環境省主催「令和3年度ローカルSDGs人材育成地方セミナー業務」 ～みんなで地域の未来を創る！SDGs アクション～

全国9か所にて開催

2021年12月～2022年2月、全国8地域で持続可能な地域づくりに向けた様々な創意工夫について議論されました。各セミナーともに、関係案内人による地域の現状、課題や地域での取り組みの紹介、講師による講演の後、講師と関係案内人との対話、参加者との質疑応答が地域の人たちとの交流の場となるような会場で開催されました。

全体セミナーでは、地方セミナーの特徴的な部分について取り上げながら、全国の事例を踏まえ、今後の地域づくりに向けたヒントを探りました。各セミナーの特徴、セミナーから得られた主なメッセージをESD-J事務局が整理すると、下表のようになります。

開催地	テーマ	特徴	キーメッセージ
北海道 日高町	「アウトドア業とローカルSDGs」	過疎地における自然資源を活かした活性化	<ul style="list-style-type: none"> ● 外から来たよそものによる豊かな自然資源の発見が地域の人たちへの刺激になる。 ● 顔の見える繋がりを大切にすべき。
宮城県 大崎市	「次世代の眼から見る大崎 耕土SDGsアクション」	水管理のグリーンインフラと地域資源活用の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ● 大崎 耕土の水管理等のシステムをグリーンインフラとして維持・継承することが重要。 ● 地域づくりを、ものづくりや人のつながりのデザイン力によって進めることができる。
山梨県 北杜市	「森という場の可能性：子どもとひろくローカルSDGs」	アルプス南麓の自然豊かな地域での自然教育	<ul style="list-style-type: none"> ● これまでの「分類する」というアプローチが限界にきており、新たに「つなぐ」という概念が出てきたが、それを超えて出てきた「全体を見る」考え方が重要。
長野県 飯田市	「若者と考える持続可能な遠山郷の未来」	人口減少地域におけるUターン、Iターン	<ul style="list-style-type: none"> ● 遠山郷の持続可能性を観光という視点から考える時、特定テーマに強い関心を持つ客に焦点を当て、地域の誇りを守ることで観光地としての利用価値を高めることが有効。
京都府 京都市	「パートナーシップで育む京都のごみ削減活動」	京都の祭りのごみ減量化と里山保全	<ul style="list-style-type: none"> ● 元栓を閉めた方が早道ーごみを出さないことが大切。 ● 祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアが地元へ戻ってその地域のごみ減量活動のリーダーとなる。
岡山県 岡山市	「SDGs 海と川を守る実践セミナー」	岡山でのごみを減らし、海を守る活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 初めの一歩が大切。自ら積極的に声を掛けたり、自分のやっていることを周りにアピールすれば地域や活動と繋がることができる。 ● きれいな海と豊かな海は違う。昔のような豊かな海を目指そう。
徳島県 板野郡	「食から持続可能な地域づくりを考える」	昆虫食によるタンパク源の確保と食品ロス対策	<ul style="list-style-type: none"> ● 一次産品の規格外品が食品ロスにつながらないように、お菓子に変えて提供する。 ● ロスされた食品をエサとしたサーキュラーフードとしてのコオロギの有用性、昆虫の飼育に使う水の量や排出される温室効果ガスの面で環境負荷が少ない。
長崎県 対馬市	「海洋プラスチックから考える対馬型SDGs」	地域課題の教育資源としての活用	<ul style="list-style-type: none"> ● 海洋ごみをはじめとして対馬が抱える様々な課題は、日本の課題の縮図ともいえるので、それらの課題を教育資源と捉え、対馬に学ぶに来る人を増やすことによる対馬の活性化も考えられる。
東京都 日比谷	「みんなで地域の未来を創る！SDGsアクション」～人+文化が地域の資源を魅力化！～	全体セミナー 	<ul style="list-style-type: none"> ● この10年が人類の正念場であり、気候変動と経済・社会的課題の同時解決を目指すことが必要。 ● 持続可能な地域づくりは、ボランティアだけでは継続が難しく、経済的に成り立つ活動にすることが必要。 ● 地域創生の鍵として、地域の諸課題の統合化、地域資源の見える化、住民の誇りの回復、学校が果たす役割、多様な主体間の協働、コーディネーターの役割、自分たちが社会を変えられるとの自覚と意欲を持つ人材育成等が挙げられる。

詳細は、開催レポート、各回の報告ページをご覧ください。全てのセミナーはYouTubeで視聴していただけます。

※ウェブサイト <https://www.esd-j.org/news/10644> 及びコードよりご覧ください。→





「SDGs を見据えた人づくり～ESD for 2030～」
 コロナ時代の持続可能な社会をどう創るかのための人材育成
 毎月第4土曜日 13:00～15:00 開催

第8回～第11回を
報告します！

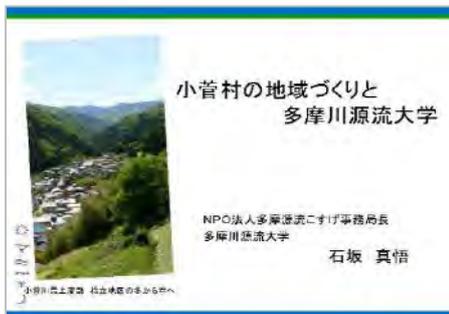
第8回「ESD×森林×地域づくり」
 2021年11月27日（土）参加者16名



- 講師：石坂 真悟さん（NPO法人多摩源流こすげ（源流大学））
- ファシリテーター：烏屋尾 健（ESD-J理事）

石坂真悟さんから、多摩川源流部にあたる95%が森林、人口約700人の山梨県小菅（こすげ）村の豊かな自然資源、環境を活かした地域づくりについて伺いました。アスレチック施設、温泉、道の駅という観光施設を中心に、地域の資源を活かすジビエ加工施設の建設、家具や木工品等の製作や、古民家ホテル、コテージの経営など訪問者、関係人口を増やすための取り組みを行っています。

高齢化率は45%を超えていますが、積極的に移住、特に教育目的の親子留学を支援しており、2014年から移住者が増え、4年間で70名以上（人口の1割）が移住しました。地域おこし協力隊も積極的に受け入れてきました。また、山間部で居住地を確保するのが難しい現状を踏まえ、単身世帯用のタイニーハウスを建設し、この地域の名物になっています。



◆ NPOこすげ・源流大学の活動（2009年～）

「知識だけでなく、生きた知恵を次世代へ」というスローガンの下、村の子どもたちに加え、多摩川流域の地域の子どもたちに源流体験を提供したり、大学生や学生インターンを受け入れたりしています。源流域での体験学習を行うことで、地域の住民、学生、上下流域に暮らす人たちが交流し、互いに無いものを補うつながり、源流資源の活用を意識できる人材の育成、コミュニティ作りを目指しています。

参加者からは、「源流を守るという地域の大切な役割がモチベーションとなって、新しい取り組みを積極的に行っている点が素晴らしい。日本中の河川の源流、流域で小菅村のような学びや交流が生まれたり良い。」といった意見がありました。



第9回「次世代のESDを担うユースのエンパワメント」
 2021年12月18日（土）参加者14名

(<https://www.esd-j.org/news/9148>)

- ゲストスピーカー：
 - ◇ 冨塚 由希乃さん（みなとく株式会社、日本サステナブル・レストラン協会）
 - ◇ 串田 大亮さん（飲料メーカー・CSV担当）
 - ◇ 原 智美さん（国立国会図書館）
 - ◇ 和田 恵さん（慶應義塾大学SFC研究所・上席所員、SDGs-SWY・共同代表、NPO法人新宿環境活動ネット・理事）
 - ◇ 加藤 超大さん（公益社団法人日本環境教育フォーラム・事務局長）
- コーディネーター：飯田 貴也さん（NPO法人新宿環境活動ネット・代表理事）

学生時代にESDや環境教育に関するソーシャルセクターにインターンシップ等の形で携わった後、企業や行政、NPOなど多方面で活躍しているユースの皆様をコーディネーター、ゲストスピーカーにお招きし、次世代のESDを担うユースのエンパワメントに向けた意見交換を行いました。

課題としては、就職のタイミングがESD/SDGs関連の活動の卒業になりがちな点、就職後のユースの活動を支えるコーディネート人材が不足していること、ユースのエンパワメントが第1期の国内実施計画から重点課題とされているが、これまでのユースの支援の成果の可視化が必要な点、環境教育・ESD業界の後継世代の育成等が挙げられました。

今後の展望として、社会人と交わる場、ネットワークの構築、海外体験などの様々な機会をユースに提供することがSDGs・ESDに取り組む重要性について気づきとなるので重要、ユースが活動のモチベーション保つためにも職場以外にSDGs/ESDに取り組む人たちと交流できる「居場所」を持つことも大切、ユースだけで集まるのではなく、世代を超え、様々なセクターの方と定期的に意見交換する場が重要であり、その中からコラボレーションが生まれてくるというような意見が出ました。
 (<https://www.esd-j.org/news/9557>)



第10回オンラインセミナー「学校教育におけるESD/SDGs」
2022年2月26日（土）参加者17名

- 講師：徳山 順子前教育長（岡山県早島町教育委員会）
- ファシリテーター：池田 満之（岡山ユネスコ協会会長、ESD-J理事）

早島町は、人口約12,700人(2021年4月)、保育園3園、幼稚園1園、小学校、中学校が1校ずつある岡山県の市町村で最も面積の小さい町です。平成27年6月17日の「教育のまち・早島」宣言のもと、早島町学校教育ビジョンの実現に向けて、保育園・幼稚園・小学校・中学校の連携のため、「めざす子ども像」を共有し、情報連携や園児・児童・生徒の交流を深めています。そのキーパーソンである徳山順子前教育長をゲストにお迎えし、早島町での取り組み実践をお話いただきました。



徳山順子前教育長

学校では、まず、探究的な学習活動の見直し、年間指導計画の再構築、育てたい力を明確にした単元学習プログラムの作成、小中学校の評価規準表の作成、つきたい資質、能力を明確にしたESDカレンダーの作成、つきたい力の明確化と振り返り時間の充実を図りました。

その結果、つきたい力を明確にし、振り返りの時間を確保したことで自分の生き方を見つめ、自己を成長させようとすることに繋がりました。そして、探究的な学習を充実させたことで、地域や社会へ貢献していこうとする児童生徒を増やすことに繋がりました。また、全国と比較して、自分には良いところがあると感じる児童生徒の割合は、早島町の子どもたちはかなり高くなっていることも分かりました。キャリア教育に関するアンケート、ESDに関するアンケート、GRIT（やり抜く力）に関するアンケート（中学校3年間の調査）の結果をみても、すべての項目でスコアが改善しています。

こうした、学校教育におけるESD/SDGsを先駆的に取り組んだ早島町の事例は、「ESD推進の手引き 令和3年5月改訂版」（文部科学省）に「早島町学校教育ビジョン」（早島町教育委員会）として紹介されています。

<https://www.esd-j.org/news/10482>



早島町学校教育ビジョンの推進



ESDリーフレット

第11回ESD-Jオンライン交流会報告
2022年3月26日（土）参加者20名



- 講師(ESD-J理事)：池田 満之、小金澤 孝昭、鈴木 克徳、鳥屋尾 健、福井 光彦

今年度の総括と次年度の企画会議を含むオンライン交流会として開催しました。まず、前半パートは参加者の自己紹介からスタートし、2021年度のオンラインセミナーの振り返りを行いました。後半は、2022年度のテーマや企画についてざっばらんに意見交換しました。テーマに限らず、オンラインセミナーをより魅力的にする方法について様々なご意見をいただきました。テーマ、企画案の抜粋は以下の通りです。

- 企業（気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD）の提言に絡めて、企業における気候変動の情報開示のあり方について、あるいは、サービス業の先進的な脱炭素の取り組み、人づくり（社員教育）取り組みについて）
- 循環経済（特に衣服関係分野など）
- 学びから協働へつながるためにも政策提言づくり
- SDGsの「自然環境関連の4つ目標」に関するテーマ
- ジェンダーに関する内容
- 好事例を自分たちの住む土地に引き寄せてこれならできそうと思わせるような仕掛けについて
- LIVE感を出して現地の方々とのインタラクションできたら良いとか、有料化してご当地物産などを手元に届けてみんなで評価するなど、オンライントリップ化する方法

今回、またこれまでアンケートにお寄せいただきました皆様のご意見・ご要望を元に2022年度のオンラインセミナーの企画を練っていきます。詳細は、メーリングリスト、ウェブサイト等でご案内いたします。

<https://www.esd-j.org/news/10613>

<2022年度ESD-Jオンラインセミナー第1回のご案内>

『ESD/SDGsを推進するためのみんなのお金！ 持続可能な社会のための税金を考える』（仮題）

- 日時：4月23日(土)13：00～15:00
- 講師：浅見 哲さん（税理士法人魁代表、ESD-J監事）
- お申込みQRコード→

お申込みお待ちしております!!

第12回ESDカフェTokyo「地球にやさしいパンを食べる」～小麦と生物多様性～

事務局 後藤 奈穂美

- ◆日時：11月23日（火）17:00～19:00
- ◆開催方法：ハイブリッド開催
- ◆参加者計28名、講師2名



私たちが美味しいパンが食べられるのは、豊かな土壌と土中菌、小麦を作る農家、必要十分な温度と水分、そして、収穫された小麦から粉をひきパンを作るパン職人がいるからです。



1. 須藤宏幸さん（パン・オ・スリール 店主）



趣味が高じて様々なパンを作るようになりました。ひよんなことから、青山のチェコ料理店からパンの製造の注文を受けることになり、パン屋になりました。パンを食べて笑顔になって欲しいという願いを込めて、パン・オ・スリール（仏語で「笑顔入りパン」）という店名をつけました。

国産小麦を使用する理由は、遠い外国から小麦を輸入すると、どうしても食品の質は落ちてしまうこと、その間、虫等に食われないように、また、外来種を持ち込まないようにポストハーベストという農薬を使わなければならないことがあります。美味しい小麦を探し求めて、問屋さんから前田農産を紹介してもらいました。もう10年前田さんの小麦粉を使っています。

◆Pain au Sourire パン・オ・スリール
<http://pain-au-sourire.jp/>



住所：〒150-0002
東京都渋谷区渋谷1-4-6-1F
（渋谷駅から徒歩5分、表参道駅から徒歩9分）

営業日：火曜～土曜 午前8時～午後6時
定休日：毎週日曜・月曜



2. 前田茂雄さん（前田農産食品株式会社 代表取締役）



岡山から開拓民として入道した曾祖父はアイヌと共に暮らし、地元で生き抜く知恵を伝授して生き残ったと聞いています。農地が学校と近いので、開拓当初から児童生徒に農業体験等の交流を続けています。先代から面白いことに挑戦するのが大好きで、巨大迷路、日本一長いピザ、トーストアート等のギネス記録を持っています。

現在、前田農産で生産している小麦は5種類「ゆめちから」「キタノカオリ」「春よ恋」「はるきりり」「きたほなみ」。品種が多いと作付けする側から考えると大変ですが、購入する側からすると選ぶ楽しみができます。毎年、畑ごとに土壌分析・残留農薬検査（健康診断）を行なっています。収穫後の稲わらは牛舎の敷き藁などに使い、糞尿等の有機物を大量に含んだ肥料として回収する循環型の農業を展開しています。GPS付きハイテクトラクターで、グリッド単位で生育状況を確認し、余分な施肥をしないように管理しています。

また、冬期ビジネスとして、レンジで弾けるポップコーンの生産・販売を始めました。



◆前田農産食品株式会社
<https://www.co-mugi.jp/>



バリエーション豊かな小麦粉、珍しい国産の十勝ポップコーンがご購入いただけます。



◆編集後記：4月のESD-J主催オンラインセミナーは、SDGsの実現とお金の関係性について考えます。SDGsの達成には、財源の裏付けが必須ですが、実際にみんなのお金をどう集め、どう配分し、活用するのが良いのでしょうか。お金を適切に使うためには、それを使う人の育成(ESD)が必要であるということについても解説していただきます。学校教育の中に、租税教育を取り入れられるヒントも得られます。是非ご参加ください。



LINEアカウント
開設しました!

特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 201 T:03-5834-2061 F:03-5834-2062

会員募集中：正会員（10,000円）、準会員（3,000円）詳しくはWEBサイトをご覧ください

